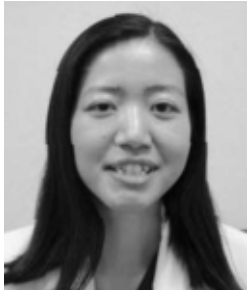
若手医師・歯科医師から、平和への希求

命と健康を守る医師の仕事と、戦時医療のギャップ



●後期研修医（立川相互病院小児科）
奥野　理奈　おくの　りな

母が沖縄出身で、母方の祖母から沖縄戦で山の中を逃げ回った体験を聞き、戦争の現実と悲惨さが焼き付けられました。母が10歳の時に沖縄が返還されましたが、それまでは米兵に襲われないよう、母は短髪で男の子のような風貌を強いられていたそうです。

「戦場では精神状態がおかしくなり、正常な感覚が破壊される」――医学生時代に米反戦活動家アレン・ネルソンさんから自身の米兵時代の戦場体験を聞きました。戦争では時代を問わず、人を殺し殺される状態が日常化し、兵士の精神状態も破壊します。だからこそ、そういう状態を作らせないこと、“予防”することが重要と感じました。

ガザ地区へのイスラエルの空爆では病院が真っ先に狙われましたが、犠牲になるのは何の罪もない女性や子どもたちです。戦争になれば国際人道法違反もまかり通るのでしょうか。争いを未然に防ぐことができれば、誰も傷つけずに済みます。

日本では、ほとんどの子どもたちは元気に健康に育っていきます。私は小児科で後期研修中ですが、小児科医はワクチン接種で病気を予防し、健診などで重度な病気を早期に見つけていく、成長・発達のサポーターだと思っています。

安倍首相は積極的に海外へ自衛隊を派遣することこそが平和を維持することだとし、医療チームが海外に派遣させられることも現実味を帯びてきました。現存する自衛隊法103条では、有事の際に自衛隊が“必要”と判断すれば民間医療機関に動員命令（業務従事命令）を出すことができます。多くの医療関係者はそのような事態は認識しておらず、患者の命と健康を守るために毎日必死に診療しています。でも、命と健康を守る医師の仕事と、命を奪う兵士のために医療を行うこととのギャップは、埋めようがないほど大きいのです。

もし法律で強制され勤め先の病院から戦場へ行けと言われたら、私は行きたくないし、誰かが代わりに行けばいいものでもありません。米国では「テロとの戦い」に国民全体が煽られ、正義のための戦争に協力しない者は非国民と非難されました。医療関係者が戦争へ連れて行かれる事態には、断固として反対したいと思います。

福島原発事故後、若い父母からエコー検査の依頼や被曝に関する不安がきかれました。核兵器による被爆も原発事故に伴う被曝も、一度起こってしまえば取り返しがつかないことに誰もが気づきました。テロや暴力には軍事力では対抗できないことも、人類は承知しているはずです。